

A. 定期点検間隔の評価検討資料

(1) 老朽化の検討手法

対象施設の健全度がD→C→B→Aへと進行する状況については定期点検で確認することになる。ここで、その施設に求められる機能を確保するためには、「健全度 A（要求性能を下回る可能性がある状態）」になる前の変化を見逃さないことが重要となる。「健全度 B（予防的対策を施さないと将来要求性能を下回る恐れがある状態）」は予防保全対策を計画的に検討する段階であるため、本検討では健全度 C から健全度 A への変化を見逃さないこと（健全度 B で推移する期間）に着目することとした。

検討手法としては、全国の漁港での初回の定期点検に関する機能保全計画データベースをもとに、施設全体の健全度（A～D）の老朽化予測線により健全度の進行状況を整理・分析した。

(2) 収集資料

機能保全計画データベースには全国 39 都道府県の 1,860 漁港で実施された初回の機能保全計画に関する情報が網羅されており、検討に必要な下記のデータがある。

（施設名、建設年、構造種別、施設全体の健全度、計画書策定年 等）

漁港施設を主な構造型式ごとに集計するにあたり、検討に必要なデータが欠落または不明確な施設を除外した。その結果、18,171 施設を検討対象とした。

漁港施設の構造型式別の健全度の割合を表-A.1 に示す。

表-A.1 漁港施設の構造型式別の健全度の割合

施設区分 健全度	防波堤				護岸				係留施設				合計			
	重力式		矢板式、鋼製		重力式		矢板式、鋼製		重力式		矢板式、鋼製				船揚場	
A	594	9%	150	23%	13	3%	5	11%	503	8%	339	20%	180	8%	1,784	9.8%
B	1,887	27%	166	26%	46	12%	15	33%	2,170	35%	569	34%	411	18%	5,264	29.0%
C	3,384	49%	274	42%	201	53%	20	43%	2,757	45%	632	38%	1,409	60%	8,677	47.8%
D	1,051	15%	60	9%	120	32%	6	13%	726	12%	138	8%	345	15%	2,446	13.5%
合計	6,916	100%	650	100%	380	100%	46	100%	6,156	100%	1,678	100%	2,345	100%	18,171	100.0%
													総数	18,171	-	

(3) 検討結果

健全度 B 評価で進行する期間についての検討結果を表-A.2 に示す。その結果、健全度 B で推移する期間は、11.1～17.7 年 (平均 14 年) であった。

この結果から点検間隔の標準期間を 10 年と設定しても施設の安全性に支障が出る老朽化を見逃す可能性は小さいと考えられる。よって、定期点検の標準的な間隔としては「10 年」とする。

表-A.2 健全度 B 評価で進行する期間についての検討結果一覧表

施設／主要な構造型式		手法 進行期間	劣化予測線			
			健全度B		健全度B,C	
			平均(年)	最短(年)	平均(年)	最短(年)
防波堤	重力式防波堤		22.3	15.2	44.7	30.4
	矢板式、杭式防波堤		15.9	11.4	31.9	22.9
護岸	重力式護岸		27.4	16.7	54.7	33.5
	矢板式護岸		17.2	12.2	34.4	24.3
係留施設	重力式係船岸、PC・RC製浮体式係船岸		19.2	13.4	38.3	26.9
	矢板式・棧橋式係船岸、鋼製浮体式係船岸		15.0	11.1	30.0	22.1
	船揚場		26.3	17.7	52.6	35.4